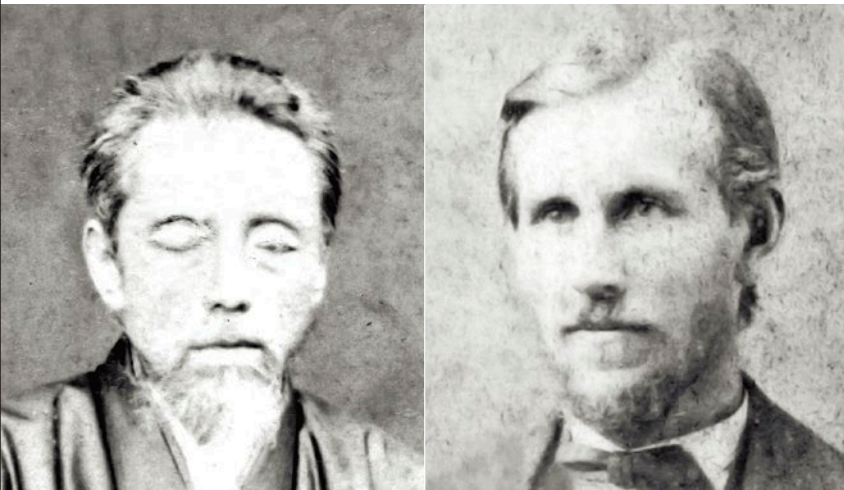




山本 覚馬 [1828～1892] 新島と結社して同志社英学校を設立。新島亡き後は、臨時総長として同志社を支えた。

J.D.デヴィス [1838～1910] 米国人宣教師で、新島の理解者。同志社英学校の運営に協力するとともにその発展に尽力した。



[1879年] 同志社英学校 第1回卒業生



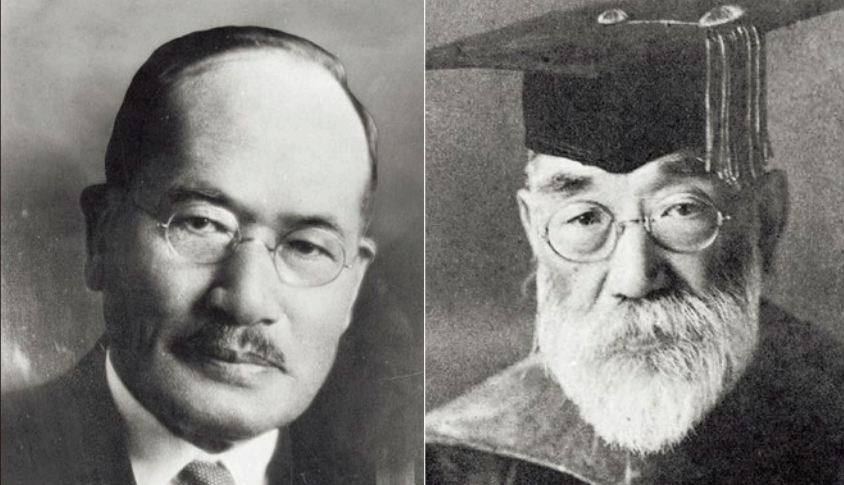
新島 八重 [1845～1932] 新島の妻。同志社女子部の基礎を築く。新島の死後は日本赤十字社黒島看護婦として従事した。

D.W.ラーネッド [1848～1943] 米国人宣教師で同志社大学第2代学長。1876年に同志社英学校に兼任以来、52年にわたり教壇に立った。



小崎 弘道 [1856～1938] 同志社第2代社長を務めた。牧師ならびにキリスト教界の指導者としても活躍した。

渋沢 栄一 [1840～1913] 同志社社長、同志社を養育。設立の趣旨に賛同し、自ら多額の寄付をするなど金銭も管理した。



原田 助 [1863～1940] 同志社第7代社長。国際的に活躍したキリスト者のひとり。ハワイ大学第1号の名義教授。

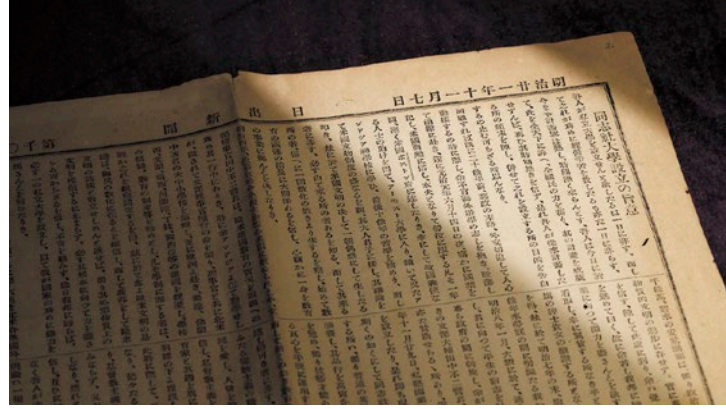
海老名 弾正 [1856～1937] 第8代同志社総長。牧師、教育者。熊本洋学校で学び、1876年に同志社英学校に入学。

建学の熱い思いを 未来へ

同志社大学 第35代学長
小原 克博



年後の1888年11月、新聞・雑誌を使って「同志社大学設立の旨意」(以下、「旨意」)を全国に公表しました。それは全国民に支援を訴えるものであると同時に、当時の社会に対する挑戦状のようなものでもありました。「旨意」の中では、大隈重信や渋沢栄一ら、当時の政界・財界を代表する人々が、新島の挑戦を強力に支援してくれていることもうかがえます。



▲ 同志社大学設立の旨意
1888(明治21)年、新島襄は20を超える新聞・雑誌に「同志社大学設立の旨意」を公表して大学設立の協力を呼びかけた。(写真は「日出新聞」第1088号付録)
「同志社大学設立の旨意」の現代版訳・多言語版はこちらからお読みいただけます。(https://150th.doshisha.ed.jp/establish-policy/)

「旨意」において、新島は自分自身の半生を振り返り(「過去」)、同志社が実に多くの方々によって支えられている現況を語り(「現在」)、同志社大学に託した教育の理想を説きました(「未来」)。創立150周年を迎える私たちもまた、あらためて「過去」に学び、過去に対する「現在」の自分の立ち位置を認識し、単なる現在の延長ではない、新しい「未来」を生み出す挑戦者であり続ける決意を新たにしたいと思います。

150周年を契機に、
キャンパスも「未来」に向けて
リニューアルを進めています。



▲ 同志社の「歴史」と「知」の集積を象徴する今出川キャンパスの新図書館



▲ 次の未来に向けたリニューアルプロジェクトが進む京田辺キャンパス



今出川校地 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
京田辺校地 〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3
https://www.doshisha.ac.jp



※渋沢栄一氏、海老名弾正氏、元良勇次郎氏、新渡戸稲造氏、徳富蘇峰氏、安部磯雄氏の写真は、国立国会図書館「近代日本人の肖像」(www.ndl.go.jp/portrait/)より引用 ※麻生正蔵氏の写真は日本女子大学より、高島京氏の写真はソウル女子大学より、伊東直氏の写真は延世大学伊東直社記念館より提供いただいたものです ※山室軍平氏の写真は同志社史料センター所蔵のポストカードより引用

同志社大学 一五〇周年の旨意

同志社大学のルーツである同志社英学校の創立から一五〇周年を迎えました。大学の礎を築いてきた先人たちに深く感謝するとともに、未来に向けて歩み続けていこうと決意を新たにしています。一五〇年の節目にあたり、同志社の創立者新島襄が大学設立の必要性を訴えた「同志社大学設立の旨意」(一八八八年)を踏まえつつ、これからの時代に本学が歩むべき道筋として新たな「旨意」をまとめました。

同志社大学【5つのビジョン】 共に知る、共に変わる——With a Good Conscience

新島襄が遺した数々の言葉は、時代を超え、今もなお私たちの語りかけ、同志社大学の進むべき道を考える上での羅針盤として、私たちの支えとなっています。同志社オリジン(「キリスト教主義」「自治自立」「良心」などの建学の理念)を再発見・再解釈し、唯一無二の誇りある輝きをもって社会を照らし、次世代社会のための新しい価値を生み出すことは、本学が担うべき固有の使命です。

創立150周年を迎えた本学は、未来に向けた中核的ビジョンとして「共に知る、共に変わる With a Good Conscience」を掲げます。「共に知る」とは「conscience(良心)」の原義であり、重要な局面で良心を語った新島の理念を受け継ぎ、実践するという意味を含めました。新島にとって、良心は自由と真理と深く結びつき、既存の秩序を超えて、人を新たなステージへと押し出す力でした。また新島は、新しい教育によって、人と社会を変える(再生する)ことができるという強い信念を持っていました。本学が150年の伝統に甘んじることなく、「共に知り、共に変わる」挑戦を続けることによってこそ、良心を社会にあまねく広めていくことができるでしょう。この挑戦を具体化するため、5つのビジョンを定めました。



5つのビジョンの詳細についてはこちらをご覧ください。

京都との共創から生み出される 新たな社会貢献

本学は、京都の特質と結びついた「伝統と革新」を併せ持った教育・研究・社会貢献のフロンティアとなつて、地域社会およびグローバル社会が抱える複雑な課題に真摯に向き合い、産官学連携を通じて地域社会の活性化を図り、日本のみならず世界に対して新たな社会形成のモデルを提示していきます。さらに、京都から巣立っていった数多くの卒業生とも連携しながら、学生が学業のみならず、スポーツや文化活動などを通じて、自らを成長させ、社会に貢献していくための場を作っていきます。

多元的イノベーションを 引き起こす研究基盤の形成

本学は、人類の知の地平を広げる基礎研究と、現代社会が直面する課題の解決を目指す応用研究を共に推進します。自然科学を主とした科学技術イノベーションと人文・社会科学を軸とした社会的・倫理的イノベーションの結合による「多元的イノベーション」を生み出し、社会に変化を促す中核となります。また、産官学連携の文理融合的教育プログラムの拡充などによって、研究と教育の高次の循環の中に学生を招き入れ、良心を備えた新しい時代の担い手を輩出します。

良心に基づいた総合知の展開と 「智徳並行」教育の深化

基礎的・俯瞰的な教養と専門知を組み合わせ、新たな価値を生み出す総合知を本学が独自の形で発展させます。徳育の基盤としてのキリスト教主義や良心を強めとし、同志社教育の核心とされてきた「智徳並行」教育^{※1}を推進します。分断と対立が深まる世界の中で社会課題に向き合い、困難にある人々を支えるため、「自治自立」「偶像不頼」^{※2}の精神をもつ人物が求められます。「共に知る」良心によって、対立する価値観をとりなし、世界の人々の良心を鼓舞できる、深い思考力と実践力を備えた人物を輩出します。

※1) 知識の習得とそれを適切に制御する倫理観の育成の両立
※2) 独立心が旺盛で、常識や規範にとらわれず自由奔放に振舞うこと

隣人愛に基づく 「国際主義」の実践

欧米により先導されてきた国際秩序が揺らぐ中、本学は、国や文化の違いを超え「共に知る」能力を備えた真の国際人を育てます。偏狭な愛国心から放たれて世界の一人ひとりを愛する大切さを訴えた新島にとって、キリスト教に基づく隣人愛と「国際主義」は一体的なものでした。この伝統を生かし、困難な状況にある人々に目を向け、確かな歴史認識を持って平和のために協働できる人物を育成します。また、幅広い国や地域から多様な人々を迎え入れた世界の縮図となる多文化共生キャンパスを形成します。

新たな時代へのゲートウェイとなる キャンパスの創造と連携

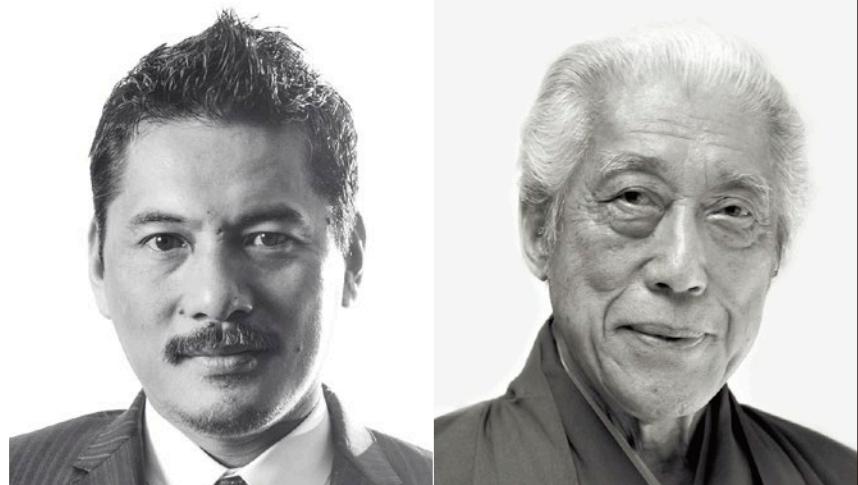
新島が大学の理想像として強調した「深山大沢」^{※3}は、様々な個性を生かし育む、多様性と驚きに満ちた場所であり、未知の世界へのゲートウェイともなる場所でした。本学は、かつて新島が描いた大学の理想を現代において実現するため、「人」「自然環境」「デジタル技術」が調和する学びの場を作ります。さらに、今出川校地と京田辺校地の2拠点を有機的に連携させるとともに、パーチャール空間を活用した柔軟で多様な学びの環境を融合させ、場所や時間を超えた知的交流を実現します。

※3) 中国古典の一部「深山大沢、実に難産を生ず」に由来する言葉で、深い山にある大きな沢から、龍のような大人物が生まれるの意



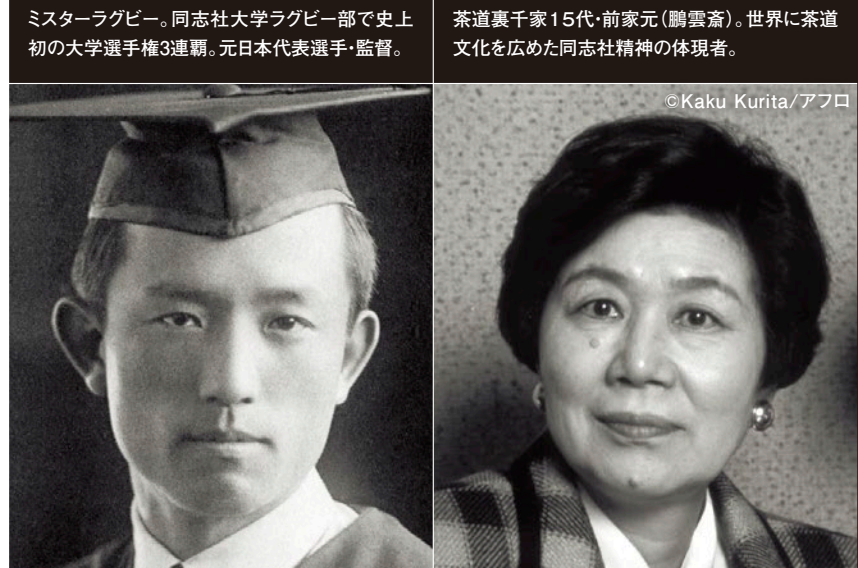
新島 襄 [1843～1890]

1864年に国費を拠出して出国し渡米、フィリップスアカデミー・アーモス大学、アンドーヴァー神学校を卒業。1874年に帰国し翌年11月29日、同志社英学校を設立した。同志社大学設立募金運動に奔走。志半ばで他れた。



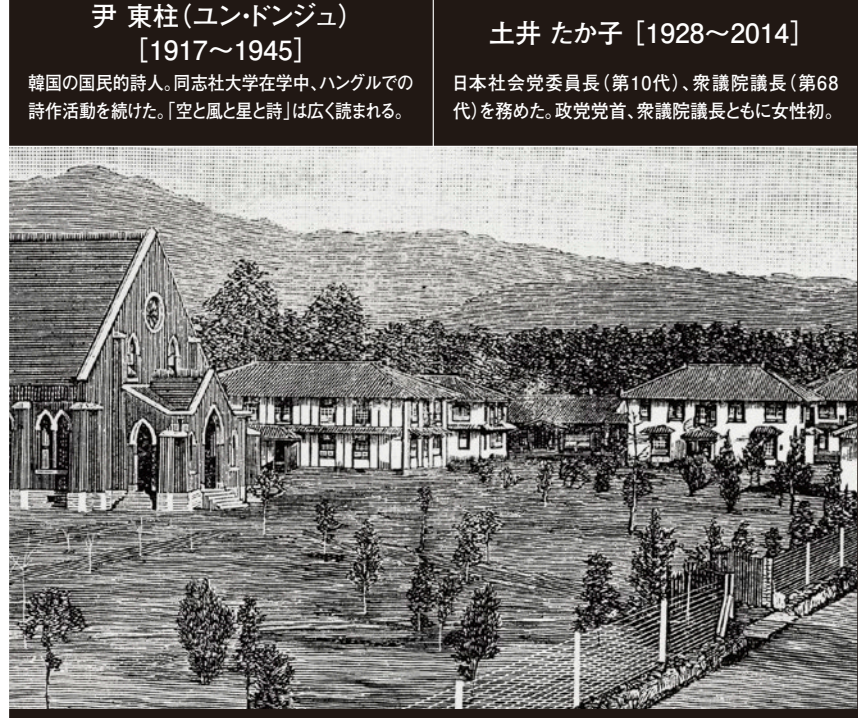
平尾 誠二 [1963～2016] ミスターラグビー。同志社大学ラグビー部で史上初の大学選手権3連覇。元日本代表選手・監督。

千 玄室 [1923～2025] 茶道黒千歳15代・前家元(團長)。世界に茶道文化を広げた同志社精神の体現者。

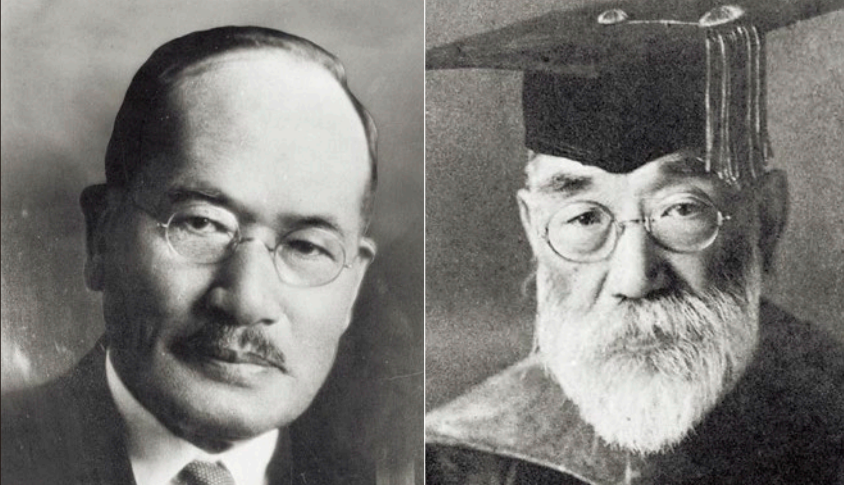


伊 東 庄 (ユンドンジュ) [1917～1945] 韓国の国民的詩人。同志社大学在学中、ハングルでの詩作活動を行った。「空と雲と詩」は広く読まれる。

土井 たか子 [1928～2014] 日本社会党委員長(第10代)、衆議院議長(第68代)を務めた。政友会党、衆議院議長ともに女性初。



[1880年代] 今出川校地の様子
出典:「新島襄先生之肖像」(セ、テ、デ、ス、1891年出版)



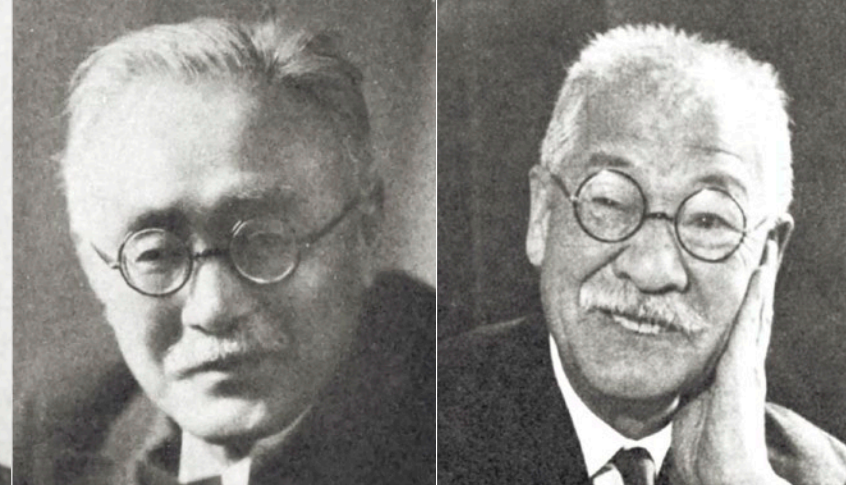
原田 助 [1863～1940] 同志社第7代社長。国際的に活躍したキリスト者のひとり。ハワイ大学第1号の名義教授。

海老名 弾正 [1856～1937] 第8代同志社総長。牧師、教育者。熊本洋学校で学び、1876年に同志社英学校に入学。



元良 勇次郎 [1858～1912] 帝國大学文科科大学(東京大学)の教授として、東大心理学の学風を築いた。同志社英学校1期生。

浮田 和民 [1859～1946] 同志社教員を経て東京専門学校(早稲田大学)の政治学、歴史学教授となる。同志社英学校1期生。



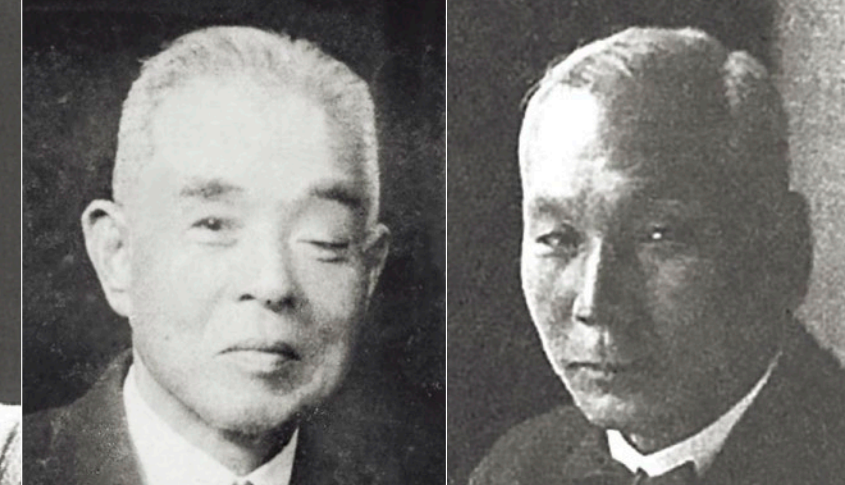
新渡戸 稲造 [1862～1933] 同志社社長、理事として経営に協力。理事退任後もたびたび同志社を訪れ、講演などを行った。

徳富 蘇峰 [1863～1957] 新島を敬愛し大学設立運動に献身的に協力。同志社英学校編入入学後に新島から洗礼を受けた。



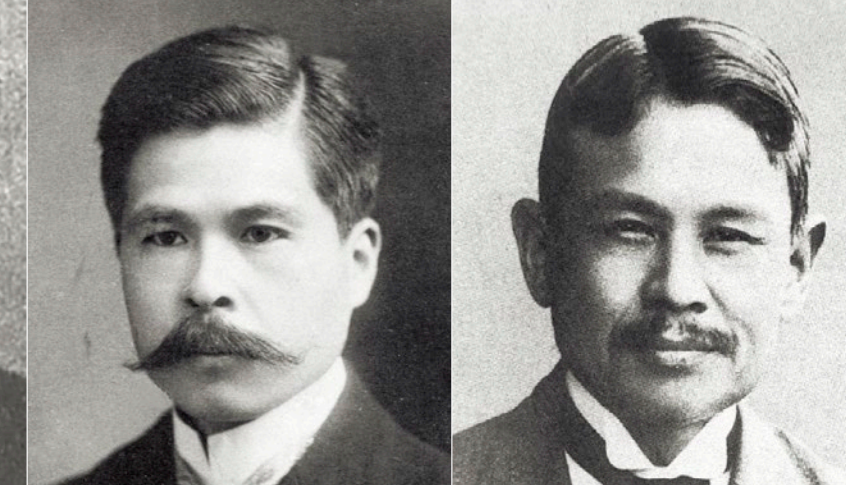
麻生 正蔵 [1864～1949] 同志社女学校専門科教師などを経て、日本女子大学校学園・校長を務めた。同志社英学校卒。

留岡 幸助 [1864～1934] 社会事業家。わが国ではじめて慈善事業に関する体系的な著書を上梓。日本における社会福祉の父。



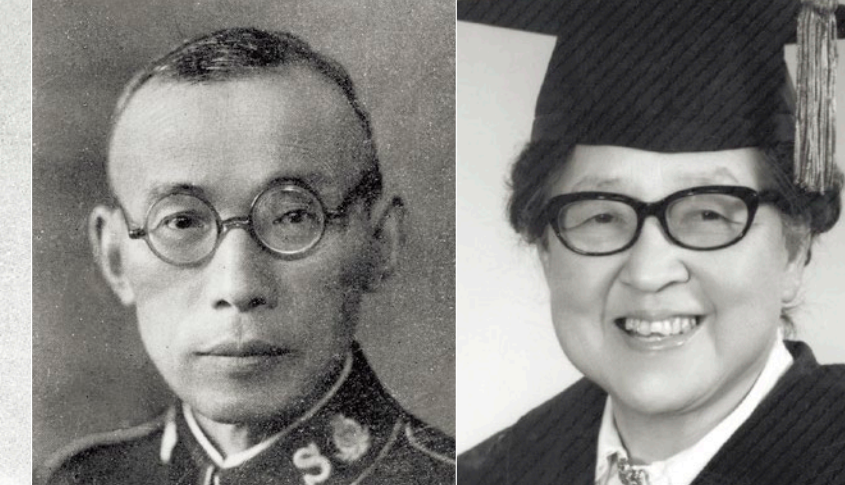
安部 磯雄 [1865～1949] 東京六大学野球創設にも尽力した社会民主主義者。同志社に在りて東京専門学校(早稲田大学)に勤務。

奥村 多喜衛 [1865～1951] 同志社神学校卒業後、ハワイに渡り伝道活動を行う。ホノルルにマキキ教会を創設。



深井 英五 [1871～1945] 第13代日本銀行総裁・貴族院議員。新島の世話による奨学金の受給者となり同志社英学校で学ぶ。

加藤 与五郎 [1872～1967] 文化功労者。「フェライトの父」「日本のエジソン」と賛賞を受けた。同志社ハリス理化学学校卒。



山室 軍平 [1872～1940] 救世軍で日本人初の中尉。伝道とともに類をみない活発な社会事業を展開。同志社普通学校入学。

高 風京 (コファンギョン) [1909～2000] 新花女子専門学校(新花女子大学)教授。ソウル女子大学の初代学長。名誉学長・理事長などを務めた。同志社大学法政学部卒。